

銭形平次捕物控

二人浜路

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、面白い話があるんだが——」

ガラツ八の八五郎は、妙に思わせぶりの調子で、親分の銭形平次に水を向けました。

「何が面白くて、^{ひざ}膝つ小僧なんか撫で廻すんだ。早く申上げないと一帳羅^{いっちょうら}が摺^すり切れそうで、心配でならねエ」

そういう平次も、この頃は暇でならなかつたのです。

「親分が乗り出しや、一ペンに片付くんだが、あつしじゃね」

「たいそう投げてかかるじゃないか」

「せっかく頼まれたが、どうも相手がいけねエ」

「^{おおや}大家か借金取りか、それとも叔母さんか」

「そんな不景気なんじやありませんよ。イキの良い若い娘なんで、ヘッ」

八五郎は耳のあたりから首筋へかけてツルリと撫で廻しました。よっほど^{てこず}手古摺った様子です。

「なるほどそいつは大家より苦手だ。若い娘がどうしたんだ」

「朝起きてみると、娘が変つていたんで。姉様人形のように、人間の首が一と晩で摺り替えられるわけはねえ。そんな事が流行つた日にや——」

「待ちなよ八、そう捲し立てられちや筋が解らなくなる。どこの娘が変つていたというのだ」

「こういうわけだ、親分」

八五郎はようやく落着いて筋を通しました。

小日向こびなたに屋敷を持つている、千五百石取の大旗本大坪石見おおつほいわみ、非役で内福で、この上も

なく平和に暮しているのが、朝起きてみると、娘の浜路はまじがまるつきり変つていたということです。

浜路はとつて十九、明日はいよいよ、遠縁の三杉島太郎次男要之助を婿養子に迎えるはずで、大坪家は盆と正月が一緒に来たような騒ぎ、当人もなんとなくソワソワと落着かぬ心持で床へ入った様子でしたが、翌あつる朝——というと、ちょうど昨日の朝、いよいよ今日は婚礼という時になって、婆やお篠しのが顔色を変えて主人の大坪石見に耳うちをしたのです。お嬢様の様子が変だから、ちよつとお出でを願いたい——と。

「それから大変な騒ぎだ。ケロリとして顔を洗って、身支度をしている娘は、年恰好も浜路と同じくらい、武家風でツンとしたところのある浜路に比べると、下町風で愛嬌があつて、優しく、ちよいと鉄火で、負けず劣らず綺麗だが、人間はまるで変つてゐる」

「それからどうした」

話の奇つ怪さに、平次もツイ吐月峰を叩いて膝を進めました。

「何しろ、色は少し浅黒いが、眼が涼しくて、口元に可愛らしいところがあつて、小股が切れ上がった、物言いがハキハキして——」

「そんな事を訊いてるんじゃないやねえ、それからどうしたんだよ」

「役者の拵えを話さなくちや、筋の通しようはないじゃありませんか、——そのちよいと伝法なのが、滅法界野暮つたい武家風の刺繡沢山なお振袖か何か鎧つて、横つ坐りになつて、絵草紙か何か読んでいるんだから、親分の前だが——」

「馬鹿野郎」

ガラツ八の話のテンポの遅さ。これが親分を焦らして、自分から乗出させる魂胆と知りながらも、平次はツイこう威勢の良い「馬鹿野郎」を飛ばしてしまいました。

「まず騙されたと思つて、逢つてみて下さいよ。相手は武家屋敷だが、これが表沙汰にな

ると、大坪家の家名に拘かかわるから、用人の小峰右内という人が、持て余してそつと、あつしに頼みに来たくらいだ。旗本の大身に御機嫌を取らせるのも、満まんざら更悪い心持じゃありませんよ」

「呆あきれた野郎だ」

「大事の大事の一人娘が行方知れゆくえずになったが、その代りのニセ首を、成敗することも突き出すこともならねエ」

「フーム」

「娘はどこへ行つた。お嬢様をどこへ隠した——とヤワヤワと訊くと、『私が浜路でございます』と、ニコニコしているんだから手の付けようはねえ。あんな時は、親分の前だが、綺麗な娘はトクだね。同じニセ首でも、こちとらのようなのだと、いきなり縛り上げて拷ご問もんにかけられる」

ガラツ八の話は遊び沢山で、要領から遠くなるばかりですが、とにかく、千五百石取の大身の一人娘が、祝言の前の晩、一夜のうちに摺り替えられていたことだけは間違いありません。

「どりゃ、その綺麗なニセ首でも押んで来ようか」

平次もとうとう御輿みこしをあげる気になりました。

二

平次とガラツ八が、小日向台こびなたたいの大坪家へ行ったのは、山の手の町々が、青葉の香にムセ返るような、四月の美しい日盛り。

「小峰さんは居なさるか。銭形の親分をつれて来たが——」
お勝手口から、心得顔に入るガラツ八の顔へ、

「あ、八五郎か、大変なことになったよ。まア入ってくれ」

当の小峰右内は、せっかちらしい言葉を叩き付けるのです。

「どうしました、小峰さん」

「どうもこうもないよ、まず見てくれ」

平次とガラツ八は、不安と焦しょうそう躁そうに眼ばかり光らせている雇人の中をお勝手から納戸へ、奥の方へと通う廊下を導かれます。

「これだ」

とある部屋の障子を開けると、中には五十年輩の女が一人、不自然な恰好で、床の上のこと切れているのです。

「婆やさんじゃありませんか」

とガラツ八。

「けさ殺されていたんだよ。下女が見付けて大騒ぎになり、ともかくも首に巻き付けた細紐そのもだけを外はずして、一応介抱してみたが、もう冷たくなっているんだ。息を吹き返す道理はない。婆やの倅せがれが品川にいるはずだから、大急ぎで人をやったが、まだ来ないよ」

小峰右内は、武家の御用人らしくもなく、少し顛倒てんとうしておりました。

「親分」

八五郎は後ろから跟ついて来た平次に場所を譲ゆずりました。

婆やのお篠は、五十前後の巖がんじょう乗なな女で、いざとなったら、相当力もありそうですが、不思議なことに大して争った様子もなく、床から半身をのり出してはおりますが、至って平穩へいげんに死んでいるのです。

「八、少し起してみてくれ、——お前は足の方を持つんだ、——あッ嚙かみ付くぜこの仏様は」

平次は死骸の頭を抱えて、床の上に真つ直ぐに起しながら、そんな事を言うのです。

「親分、脅かしちゃいけません」

ガラツ八はドキリとした様子でふり返りました。

「首を起した弾みで、齒が鳴ったんだよ。心配することはねエ」

「あんまり結構な人相じゃないから、ツイドキリとしますよ」

「罰の当つたことを言うな。——この紐は少し華奢なようだが」

「その代り丈夫ですよ、真田紐だから」

平次は兇器に使われた、萌黄の真田紐を取上げました。

「こいつは何に使つた品だろう。刀の下緒じゃなし、前掛けの紐じゃなし、ひどく新しい

が——」

平次は萌黄染料の匂いを嗅ぎながらそんな事を言うのでした。

「お嬢様の御道具の箱を縛つた紐だ」

小峰右内は以ての外の顔をして見せます。

「その嬢様は、どこに居なさるんで？」

「逢わせましょう。が、その前に、ちよつと訊いておきたいが——」

と小峰右内。

「へエ、——どんな事で」

「これが表沙汰になると、お家の瑕瑾かさきんになる。奉公人の一人や二人死んだのは、急病の届出ですむが、お嬢様が変わつたとなると、これはうるさい、——万事吞込んでくれるであらうな」

「それはもう、御用人様。あつしは町方の御用聞で、御武家屋敷のことには、立入る筋じやございません。御老中、御目付などの御歴々と、あつしの仕事とは、何の関係もないのでございます」

「よしよし、そう判つてくれると大変ありがたい」

「たいそうお困りの様子ですから、お嬢様を捜し出してあげた上、町人や奉公人に悪いのがあつたら、それは容赦をいたしません」

「じゃこう来てくれ」

右内は二人を案内して、また幾間か先へ暗い廊下を進みました。

「ここだ」

小峰右内の開けた唐紙の中を見て、二人は顔を見合せました。婆やの死骸とは比べもの

にならない、そこには刺戟しげき的なものがあつたのです。

三

それは、八五郎が口を極めて讚美した、替え玉の娘でした。いよいよ一と責めする気になつたものか、燃え立つような赤い扱帯しごきでキリキリと縛り上げ、嫁入道具のおびただしく取散たんすらした中、箆たんすの引手にそれを結えてあつたのです。

ドカドカと入る三人の姿を、娘は顔をあげて怨めうらしそうに眺めましたが、すぐまた眼を伏せて、きかん気らしい唇をキツと結びました。ガラツ八がすっかり有頂天になつて、手持ボキヤブラリの語彙ゴを総仕舞にただけあつて、悩ましき情景の中に据すえるにしては、この上もない妖艶さでした。

「どうしたことです、これは？」

平次は娘と用人の顔を等分に見比べました。

「この娘が怪しいとでも思わなきや——」

右内は苦りきつているのです。

「それは？」

「見も知らぬ人間が、明日は祝言というお嬢様の代りになっていたり、何か仔細しさいを知って
いそうな婆やが殺されて、首に巻いてあつた細紐がこの部屋から出た品だったり、疑えば
いくらも変なことがある。殿様がこの娘を責めてみるとおっしゃったのも無理はあるまい」

「御ご尤もつとですが、こんなにひどく縛むすつちや可哀想です。どれ」

平次は娘の後ろに廻ると、小手と首を締め上げた扱しづ帯きを解いて、その前に片膝を突きま
した。

「さて、改めて聴くが、お前はどこの誰だえ？ 誰に頼まれてここへ入って来たんだ。――
――人殺しの疑いを受けているから、用心をして返事をするがいい。――黙っていちや、言
い訳の出来ないものと思われるかも知れないよ」

「……………」

娘はチラリと平次の方を見ましたが、相変らず黙りこくって、唇を開こうともしません。
「銭形の親分だよ。お前のために悪いようにして下さる氣遣いはない。知っていることを
みんな言うがいいぜ」

ガラツ八は横から長い顔なんがを出しました。昨日も一度逢つてるんで、これはいくらか心易

立てです。

「申しますワ、銭形の親分さんなら」

娘は顔をあげました。長い瞼毛まつげが濡ぬれて、真珠のような涙が豊かな頬にこぼれます。

「それがいい。——お前が正直にしてくれさえすれば、この俺が引受けて、悪いようにはしてやらない」

平次はそう言いながら、もういちど立上がって、娘を縛った扱帯しじぎを、みんな取払ってやりました。後ろの方で、小峰右内がむずかしい顔をしておりますが、平次はそれを振り向いても見なかつたのです。

「私はやはり、このうちの子なんです。浜路というのは、私の名前に違いありません」
娘の言葉は平次にも予想外でした。

「それはお前、本気で言っているのか」

「え、——もつともそれを知つたのは、ツイ一と月前のことだけれど」

「それまでお前は何という名だつたんだ」

「関せきといいました。草加そうかの百姓うまきち午吉の子ということで育ち、浅草に引越して、もう十年にもなります」

「もう少し詳しく話してくれ。その草加で育ったお前が、どうしてこの大坪様の子だと名乗ったんだ」

お関の話は、少なくとも平次とガラツ八には奇つ怪なものでした。

それは、今から十九年前のこと、旗本大坪石見の奥方は、娘浜路を産んで間もなく亡くなり、嬰兒えいじは草加の百姓午吉夫婦に預けられて、三つになるまで育ち、それから小日向こびなたの大坪家へ帰されたのですが、お関に言わせると、午吉夫婦は自分の娘お関が、里子の浜路と、よく似ているのを幸い、娘をゆくゆく大旗本の跡取り娘にするため、人知れず取換えで育て上げ、浜路をお関にして手許に留めおき、お関を浜路として、三つになる時小日向のお屋敷へ返した——というのでした。

「私も、そんな事とは知らず、午吉夫婦の娘のつもりで、浅草で小さい荒物屋の店を出している偽にせの両親のところで育ちましたが、今から一と月前、母親が病気で死ぬとき、——これは一生涯に言わないつもりだったが、黙って死んでは冥途めいどの障りさわ、何がどうあろうとも、言わずに死ぬわけには行かないと、父親の留守中に、そつと私に話してくれました」

あまりの事に、平次もガラツ八も、用人小峰右内も、開いた口が塞ふさがりません。

「母親が死んだ後、父親の午吉は年にも恥じぬ放埒ほうちやうで、家へ寄り付いてもくれません。

思案に余つて、昔からの知合いで、私を里子に出す時世話をしてくれたいという、このお屋敷の婆や——お篠さんを呼出して相談すると——」

「……………」

話の重大さに、聴く方がツイ固唾かたずを呑みました。お関の浜路は、何の作意もなく静かな調子でつづけます。

「お篠さんに話をすると、最初はひどく驚いていましたが、急に乗気になって、——お嬢さんの婚礼が明日に迫つて、今更どうしようもないが、実はお嬢さんはひどくこの祝言を嫌がっている。無理に三杉さんの御次男を迎えたら、三日経たないうちに、お嬢さんは自害をするに違いない。急場の凌しのぎが付いたらまた何とかなろう。お前が本当にこの屋敷のお嬢さんなら、ちようど仕合せだから、今晚そつとやつて来て、お嬢さんを入れ換つてくれという頼みでした」

「……………」

「私に否やのあろうはずもありません。今ではどこへ行く当てもない私、浅草の荒物屋へ帰つたところで、明日の暮しの工夫もつかない私ですもの。お篠さんの頼みの通り、お嬢さんと入れ換つて、翌ある朝、お篠さんに見付けられたように仕組みました」

「お嬢さんはどこへいらつしつたんだ」

右内は我慢がなり兼ねて口を挟みました。

「それは判りません。私は庭木戸の外でチラと見たつきりですもの。——でも、そこには、若いお侍が待つている様子でした」

「若いお侍？ 顔を見なかったのか」

「何にも見ません。背が高くて真っ直ぐにシャンと立っていたことだけは気がつきました。縁側の戸を開けて、お篠さんが呼んでいるので、大急ぎで入ったんですもの」

お関の浜路の言葉はあまりにも常識の桁けたを外れますが、ことごとく作り事にはあまりによく筋が通ります。十九年前この屋敷の奥方が亡くなって嬰兒えいじ浜路を草加へ里子に出したのも事実、その浜路が十九になって、婿選みという段になった時、父親の気に入った三杉の次男要之助をひどく嫌っていたことも事実です。

「右内、困った事になったのう」

唐紙を開けてズイと入って来たのは、五十を幾つか越したらしい立派な武家——主人大坪石見でした。

「殿様、さぞ御心配なことで。——私は神田の平次でございます」

平次は丁寧に膝を直しました。

「御苦労だな。——近ごろ神田の平次という大層な評判だから、右内がとやかく言うのを、私から頼むように言つてやったのだよ。御目付衆の耳にでも入ると面倒だ。何とかよいように頼むよ」

「かしこまりました。御当家の落度ではございませんから、決して御迷惑になるような事はいたしません。ところで——」

「何か訊ねたいことがあるのか」

「お嬢様が三つで里から帰られたとき、何かこう——変だな——と思召したことはございませんでしょうか」

「忘れたよ、平次。奥でも生きておれば、また何か思い付くことがあるかも知れないが、その頃私は甲府こうふの御勤番ごきんぱんだな」

「御尤ごもつともで。——もう一つ承ります。三杉様御次男との御縁組は変更は出来なかつたのでございますか」

「早く婿を欲しいと思つてツイ娘の気も知らずに運んだ私の落度だ。が、武士と武士との約束は容易に変更の出来るものではない。娘が嫌だと申しますからと言つて縁談を断わる

わけに行かないよ」

「もし、お嬢様が御無事でお戻りになりましたら、やはり元の縁談をお進めになるつもりで——」

「娘の病気と言つて祝言を伸ばしてあるが、下人の口がうるさいから内々三杉家では承知しているかも知らない。向うから断わつてくれば一番無事なのだが——」

武士たることの悩み、人の子の父たることの悩みに、大坪石見は分別らしい顔を伏せました。

四

平次とガラツ八は一応屋敷の中にいる人間全部に逢つてみました。男は用人の外に中ちゆう間げん、小者、庭掃きの爺にわは、女はお小間使のお延のぶ、仲働きのお米、外にお針に飯炊き。それからもう一人、主人大坪石見の甥おいで、宇佐川鉄馬というもつともらしい四十男が、小峰右内の手伝いをして、十年越しこの屋敷の掛り人かかになつております。

「私は宇佐川鉄馬、——平次殿か、なにぶんよろしく頼みます」

薄髯うすひげを生やした、少し無精らしい角顔の背の低い男——いつでも眠そうで、無口ですが、そのくせ仕事には至って忠実で、障子も張れば、水も汲むといった肌合の人間です。

「お嬢様をつれ出した若い背の高い侍というのにお心当りはありませんか」

平次はそんな事から始めました。

「いや一向——私は滅多に浜路さんとは口をきかないのでな」

宇佐川鉄馬は照れ臭そうに笑います。腹の底から女を諦めていそうな男です。宇佐川鉄馬は、本当は三十を越したばかりですが、誰の眼にも四十過ぎとしか見えない無精男です。

「お嬢さんの代りになっている、あのお関とかいう娘はどうです」

「お関といふのかな、あの娘は。先刻まで私は真物ほんものの浜路だなんて言い張っていたが——もつともそんな天一坊気取りさえなければ、とんだ良い娘だ。下町育ちで解りが早いから」

鉄馬はそんな事を言つて他所事よそごとのようにニヤニヤするのです。

「ところで八」

「へエ」

「お関の親父の午吉うまきちは、浅草で荒物屋をしているようだ。町所を訊いて、捜し出してく

れないか」

「へエ——」

「万事はその午吉が知っているに違いない。たぶん安賭蜴か何かへ潜り込んでいるんだろう。愚図愚図言うなら、しよつ引いて来るがいい。親父が口を割りや、一も二もあるまい」

「へエ——」

八五郎は気軽に尻を端折りました。少し花道を駆け出すような調子ですが、文句のないのと気の早いのと、そして鼻の良いのがこの男の取柄です。

平次は一とわたり奉公人に逢ってみましたが、何の得るところもありません。少し綺麗なお延も、気性者らしいお米も、中間も、小者も、皆んな一季半季の奉公人で、大それた事をする理由を持っていそうなのはなかつたのです。

用人の小峰右内は五十少し越したらしく、額の上の光り具合、少し驚になった赤鼻、金壺眼——など、あまり結構な人相ではなく、慾も人並には深そうですが、主人大坪石見の頼んだ平次を、自分の思い付きのように見せかけたのと、お篠を絞め殺した真田紐を、なんの躊躇もなく、嫁の道具を縛った紐と言いきったのが、少し変と言えば変ですが、その外には別に怪しい節ありません。大坪家に二十年以上も住んでいる人間ですから、

渡り用人並に、少しくらいは溜めていたところで引抜いて大伴おおともの黒主くろぬしなどに化ける氣遣いはまずなさそうです。

もつともこの屋敷のもので、一番背の高いのは右内で、これで夜目に若い侍と間違えられる見込みがあれば、少しは疑いの圈内に入るかもわかりません。

平次は女たち一人一人に、浜路の身持を訊きましたが、婿がねに定まった、三杉の次男坊を嫌い抜いてることは事実ですが、そうかといって、言い交した男があるうとは思われず、若い娘らしく、いろいろ奉公人たちと話はしていたが、さして執しゅうじやく着じやくした名前はなかつたということに一致するのではした。

ここまで来ると、平次の探索もハタと行詰ります。この上はガラツ八が午吉を見付けるのを待つ外はないでしょう。

平次は最後にもういちど、婆やお篠の死骸を見舞い、それから押入の中に首を突っ込んで、徳利が一本隠してあるのを見付けました。婆やお篠はことの外酒好きで、そつと寝酒をやることは奉公人達も知っていました。徳利は綺麗に洗って酒の匂いもありません。

五

「親分、驚いたぜ——」

ガラツ八が帰つて来たのは、中一日おいて三日目の昼過ぎでした。

「何を驚くんだ。御用聞が往来を飛んで歩くと、世間様の方が驚くぜ」

平次は何かこう、腐り抜いていたのです。いっこう他愛もないように見えた大坪石見の屋敷の騒ぎが、その後少しも埒があかず、お閨の浜路と、用人右内と睨み合つたまま、どうにもならぬ日がつづいていたのでした。

「親分、こいつは驚くぜ。荒物屋の午吉——草加から出て来て、安賭場を泳いでいる男が、土左衛門になつて大川橋から揚がつたんだ」

「何？」

「それね、親分だつて眼の色を変えるんだもの。それを見たあつしが、大川橋からここまで駆けて来たに不思議はねエ」

「で、死骸に变りはなかつたのか」

「大変り、お篠の伝で、三尺で絞められているんだ。こんどは真田紐じゃねえが、水の中
でふやけているから、瓢ひょうたん 箆へらのように括くくれていやがる。見られた凶じやあねエ」

「なんて口をきくんだ。仏様を見たら、念仏の一つも称とえて来い、馬鹿」

「へエ」

「それつきりか」

「それつきりならお代は要らねえ。腹巻に呑んだ財布に、小判が三枚」

「たいそう持つてやがるな」

「——その上この十日ばかり、張つて張つて張り捲まくつたそうだから、三文博奕ぼくちにしても、五両や十両は損すつているそうですよ」

「よしよしそれだけ聴けばたくさんだ。茶漬でも一杯搔か込んで、一緒に来ないか」

平次はもう外出の仕度をしておりました。

「どこまでも行きますよ。一日や半日食わなくなつて、なア——」

お勝手へ飛込むと、手桶ておけからいきなり柄杓ひしゃくで水を一杯——

「あれ、八五郎さん、御飯の仕度をしていますよ」

お静は驚いて、その鯨飲げいりん振りを眺めました。

二人が小日向へ駆け付けたのは、その日が暮れかけた頃。

「あの娘に逢わせて下さい」

右内の案内も待たず、平次はお関の浜路の部屋に飛込みました。

「ま、錢形の親分」

「親分じゃねエ、太え阿魔だ」

平次は日頃のない乱暴な口をきいて、お関の前へヌツと立ちました。

「あ——れエ」

「お姫様らしい声を出したって、驚くものか。なア、お関」

「……………」

「お前の父親が、殺されたんだぞ」

「えッ」

「十九年間の育ての親だ。お前の生みの親でなくたって、仇かたきくらいは討つ気になってもよ
かろう」

「本当ですか、親分、それは」

お関の表情も、さすがに強張こわばって行きます。

「どこから入ったか、十五六両の金を持って賭場を泳いでいるうち昨夜ゆうべ、三尺で首を絞め
られて、大川へ投ほうり込まれたんだ。死骸の上があったのは今日、八五郎が見て来たんだから、

嘘じゃねエ」

「まア」

「可哀想に引取り手がないから、まだ大川橋の袂たもとに、筵むしろをかけて投つてあるぜ」

八五郎は横合から口を出しました。

「……………」

「お前の父親を殺したのは、お前をここへおびき寄せた人間だ。——お前の父親の口から何もかもバレそうになって、八五郎の先廻りをして虐むじたらしいことをしたんだ」

「……………」

「お関、芝居はもうたくさんだ。お前がこの間話した、嬰児あかごと嬰児を取換えるというのは、一応筋になりそうだが、実はそう容易たやすく行く芸当じゃない。草加の百姓へお嬢さんを里に出して、立派なお旗本が三年も投つておく道理はないし、三年経つて帰つて来た偽首を屋敷中の者が皆んな気が付かないはずはない」

「……………」

平次の論告に圧倒されて、お関の浜路はタジタジとなつてしまいました。それでも頑固つづに口を緘つづんで、実は——と言つてくれそうもありません。

「お前は黙つていさえずれば、よいつもりだろうが、黙っていると、婆やお篠を殺した罪を背負つて、しおきだい 処刑台に、その綺麗な首をさらすかも知れないよ。それも承知だろうな。この細工を引受けたのは、お屋敷の中では婆やだ。婆やが死んでしまえば、お前の乗込んだいきさつ 経緯を、知つてる者はなくなる——」

「……………」

「その婆やが、お前の部屋にある真田紐で絞め殺されたんだよ。あの晩お前の部屋へ入つて真田紐を持つて行つた者がなきや、下手人はお前だ」

「そんな、そんな、親分」

お関はさすがにあお 蒼くなりました。

「よく考えてみるがいい。俺はしはんとき 四半刻（三十分）ばかり、屋敷の内外を見廻つて来る」
平次はお関を一人おいて八五郎と一緒に外へ出てしまったのです。

六

「親分、——お関は本当に婆やを殺したでしょうか」

八五郎は庭から木戸へ出る平次の後ろからそつと声をかけました。

「そんな事があるものか」

「だってそう言ったでしよう」

「あれは脅かしさ。——若い娘が、寝ている大女を絞め殺せるものかどうか、考えてみるがいい」

「あつしもそう思つたんだが——」

「それにこれを御覧」

平次は紙入から銀の小さい耳搔きを出して懐ろ紙に挟んで見せました。

「黒くなっていますね」

「いつか、お篠の死骸を起した時、——噛み付きそうだ——つて言つたらう」

「へエー」

「あの時、この耳搔きを死骸の口の中に入れてんだ。帰る時そつと抜いてみると、この通り燻したように真っ黒になっている」

「……………」

「あの婆やは石見銀山で毒害されたんだよ。婆やが寝酒を呑むことを知っている人間の

仕業だ」

「それなら、真田紐は余計じゃありませんか」

「ちよつとお関の方へ疑いを向けて、その間に婆やを葬らせるつもりさ。自分の方へ疑いのこないようにする計略だよ」

「悪い野郎だね」

「野郎だか女だか解らない。——おや？」

平次はギョツとした様子で立ち止まりました。

「親分、何で？」

「あれを見るがいい、悪人には不思議に手ぬかりがあるものだ」

指さしたのは、お勝手寄りの壁に立てかけた竹竿たけざおの切れっ端、六尺くらいもあるのに、

一尺ほどの曲った横木を縛った十字形のものでした。

「あれは何で？」

「あの棒に着物を引つ掛けて、上へ団扇うちわか何か差したのを、木戸の外の下水の縁へでも立てておくと、面喰らった若い娘は、真つ暗な晩だったら、背の高い男と見るようなことはないだろうか」

「なるほどね」

「それでも思わなきや、あの十文字の使い道が判らないよ。それに横木は人間の肩くらの勾配こうばいで、下へ流れているのは、手数のかかった細工じゃないか」

「すると」

「背の低い人間の細工だ」

「シツ」

「人が来たのか。よしよし、もういちどお関のところへ行ってみよう」

二人が入って行くと、お関はもう観念しきった姿でした。

「親分さん、私が悪うございました。どうぞ縛しばって下さい」

打ち萎しおれて畳に手を突くと、この娘はとんだいじらしくなります。

「よしよし、みんな言うがいい。悪いようにはしない」

「みんな誰かの細工さいくです。父さんがお金を貰って、私にこの役を勤めてみるがいいって言
うんです」

「フーム」

「私も、いつまで経っても浮ぶ瀬のない貧乏暮しに、すっかりイヤ気がさしていました。

夏になつても冬になつても、着物一枚買うことの出来ないような——」

「……………」

「お前くらいのきりようなら、立派に旗本のお嬢様で通る。向う様では祝言が嫌さに、どうでも家を飛出したいって言うんだから、これほど功德くどくなことはない。——それに殿様はそう申しては悪いが、無類のお人好しで、どんな事があつたつて、お手討などになりつことはないし、こんな面白い狂言があるものかつて言うんです」

お転婆で、無法で、冒険好きな下町娘は、果てしもない貧乏うに倦みきつて、とうとうこんなとんでもない役を買つて出る事になつたのでしよう。

「それつきりか」

「え」

「お前は大変な間違つたことをしているとは気が付かないだろう。——俺は人様に意見を
するほどの年寄りじゃねえが、お前が馬鹿な事をしたばかりに、婆やさんとお前の父親が
死ぬような事になつたじゃないか」

「親分さん」

「泣いたつて追つ付くことじゃない。——この上、このお屋敷のお嬢さん——浜路さんに

間違いがあつたら何とする」

「親分さん、どうしたらいいでしょう」

「お前は本当に、父親に金をやって、こんな事をさせた相手を知らないのだな」

「え、私は何にも知りません」

「本当か」

平次はしばらくこの飛上がりな娘と睨にらみ合いました。すっかり自尊心を失つて、ときどき痙攣けいれん的に顫ふるえてはおりますが、蒼白く引緊ひきしまった顔は旗本屋敷などにはない不思議な魅力です。

「親分、勘弁してやって下さいよ。可哀想に」

ガラツ八はたまり兼ねて助け舟を出しました。フェミニストの八五郎はこの上お関の困惑するのを見てはいられなかつたのです。

「馬鹿ツ」

「へエ——」

「お前は外へ行ってみる。先刻さつぎの十文字になつた竹は、もう隠された頃だ。あの竹が見えなくなつたら俺を呼べ」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。

「お関、今お前の父親の仇を討つてやる。見ているがいい」

「……………」

そんな事を言う間もなく、外から八五郎の恐ろしくでっかい咳せきばら払いが聴えます。

七

「御用ッ」

平次が飛付いたのは、掛かかり人うじの宇佐川鉄馬でした。

「あッ、何をするッ」

「宇佐川鉄馬、御用だぞ。お篠を殺し、午うまきち吉を殺したのはお前だ」

「何を馬鹿なッ」

宇佐川鉄馬は小さい身体を跳おどらせるると、苦もなく生垣いけがきを越えて、四角な顔を醜ゆがく歪ゆがめたまま、逃げ腰ながら一刀の鯉こいぐち口を切ります。

「殿、御用人、——悪者はこの野郎ですよ。縄付を出して構いませんか。それとも追い込んで、槍玉にでも上げますか」

縁側へ出て来た、大坪石見と、小峰右内の方を見ながら、平次は用心深くこう言いました。

人の好い大坪石見はハタと当惑した様子です。縄付を出す不面目を考えないわけではありませんが、手一杯に暴れられると、大坪石見の手でこの男を成敗などは思いも寄りません。

「それじゃ縛ってしましましょう。人別を抜いて、午吉殺しで処刑すれば」

平次は先の先まで考えながら、ジリジリと生垣に迫ります。いつの間に廻ったか、ガラツ八の八五郎は、鉄馬の退路を断って、後ろから十手を光らせて、機会を待っているのです。

「畜生ッ、どうするか見やがれ」

宇佐川鉄馬は一刀をギリりと抜くと、一気に縁側へ襲う様子を見せましたが、平次の構えの並々ならぬを見ると、諦めたものか、いきなり肌をくつろげて、ガバリとその切っ尖きさきを自分の腹へ——。

「あッ」

おどろき騒ぐ人々、それを尻目に、宇佐川鉄馬は声を絞りました。

「えッ、寄るな寄るな。腹を切つてやるのが、せめてもの志だ。手一杯に働けば一人や二人は斬れたが——」

「待て、待て、鉄馬」

縁側の大坪石見の頭には、咄嗟とつさに隠された娘の行方ゆくえの事が閃ひらめいたのです。

「その代り、俺が死んでしまえば、浜路は誰も気の付かぬところで飢死うえじにだぞ。この鉄馬という近い身寄りがありませんながら、大坪家の跡取りにも、娘の婿にも考えなかつた罰ばちだ。へッ、へッ、へッ、へッ」

凄惨せいさんな血の笑いが頬にこびり付いて、そのまま死の色が上へ刷はかれて行くのです。あたりは次第に暗くなりました。

「鉄馬、それは罪が深いぞ——鉄馬、頼むから、浜路のいる場所を教えてください」

縁側から跣足はだしのまま飛降りて、大坪石見は生垣越しに、死に行く甥に声を掛けました。

「へッ、へッ、へッ、親も親なら、娘も娘だ——思い知るがいい」

「鉄馬」

「十何年間冷飯を食わして、さんざんコキ使いながら、それで恩を施したつもりでいるんだろう。雇人ならとうに飛出している」

「鉄馬」

「見るがいい。浜路はどうせ、この俺と一緒に死ぬのだ。いや、俺よりおくれても、一日とは生き伸びまい。——あんなに弱っているんだから、ヘツ、ヘツ、ヘツ、ヘツ」

「鉄馬、頼む、浜路を助けてくれ」

「嫌だ」

「鉄馬」

「……………」

「鉄馬」

大坪石見が生垣を押破つて飛付いた時は、宇佐川鉄馬は、喉のどぶえ笛を掻き切つて、こと切れておりました。

その後の騒ぎは大変でした。後始末もさしおいて、あと一日とは生きないという、娘の浜路の行方を、必死になって捜したのです。

宇佐川鉄馬の出廻る先は、夜中ながら一軒残らず手を廻しました。隣近所は、恥も外聞

もなく訊き歩かせました。が、どこにも居ません。土蔵も物置も、天井も床下も、わけても宇佐川鉄馬の居間は、嘗^なめるように捜しましたが、娘一人隠すほどの場所もなく、簪^{かんざし}一つ、紐一本落ちてはいなかつたのです。一と晩の努力も空しくて、夜は白々と明けました。「平次、なんとか相成るまいか、浜路は当家のたつた一と粒種だ。千万金を積んでも、この石見の命に替えても捜し出さなければならぬ」

大坪石見は、平次の前に手を突いて頼み込んだのです。

「あつしでも、この上の捜しようはありませんよ。宇佐川鉄馬さんの怨^{うら}みだ。十何年も居候をしていた人じゃ、変な気にもなるでしょう」

「どうすればよいのだ、平次」

「よく弔^{とむり}つて上げて下さい、——それっきりの事ですよ。ところで」

平次は深々と腕^{こしめ}を拱^{こまぬ}きました。

「親分」

「お前は黙っている」

「あつしは変な事を考えたが」

と八五郎。

「なんだ」

平次はガラツ八の方をジツと見ました。

「お嬢さんの隠された場所が判ったような気がするんです」

「俺も判ったような気がする」

「二人で書いてみましょうか」

「面白からう」

紙にも硯にも及びません。平次は火鉢の灰へ、八五郎は縁の下の柔かい土へ――。

「ひいふのみ」

火鉢と縁の下と、位置を変えてのぞくと、二人とも、

――長持の中――

とこう書いてあったのです。

それつと飛んで行つて、お関のいる部屋の隣。嫁の道具を一パイに積んだ下から、長持を引出して蓋を払いました。

「あッ」

中には娘浜路が滅茶滅茶に縛られた上、猿轡さるぐつわまで噛まされて、息も絶え絶えに、半

死半生の身を横たえていたのでした。

*

「八、どうして長持の中と判った」

帰り路、朝の清々すがすがしい風に吹かれながら、平次は訊きました。

「ただなんとなしに、そんな気がしましたよ」

「心細いなア」

「じゃ親分は」

「長持の蓋の角に生々しい傷があつて、穴があいていたことに気が付いたんだ。祝言前の嫁の長持に穴があるわけではない。あれは息抜きに違いないと気が付いたのさ」

「なアーる」

八五郎はピタリと額を叩きました。親分の推理に、ともかく直感で追いついた自分が嬉しかったのです。

「ところであの居候は可哀想だね」

「あんな悪い野郎が？」

「十何年も給料のない奉公人並に扱われて、気が少し変になったのさ」

「それから、あのお関も可哀想じやありませんか」

ガラツ八は臆^{おく}面^{めん}もなくこんな事を言うのです。

「せいぜい親切にしてやるがいい。親父が殺されて、たった一人になったんだから心細かろうよ。しょんぼりと帰って行った姿が目に残るぜ。もつとも顔は綺麗だが心掛けはあまり結構じゃない」

そんな事を言いながら、二人は妙に物足りない心持で神田へ急ぐのでした。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十一）懐ろ鏡」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物全集第二十巻 狐の嫁入」同光社磯部書房

1953（昭和28）年11月15日

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1940（昭和15）年5月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2019年7月30日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

二人浜路

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>